人間発見

サトヤマを世界に ④

農村漁村研究家　あん・まくどなるどさん

作家・写真家の磯貝浩氏（故人）との間には、カナダ・極北の民のリポートとは別にもう一つ進行中のプロジェクトがあった。日本の海岸線を一周する漁村実地調査だ。漁業者の生活と宗教観、漁村から見た市場経済や地球温暖化など、現場で見聞きし考えたことを国立民族学博物館の「季刊民族学」に「海人万華鏡」と題して連載を始めた。ある回ではこう書いた。「漁村にいるといつも『死』が添い寝しているような気分になる」

軽自動車を改造したキャンピングカーで海岸線の八割は回りました。ボディーに私の名前を書いたら和菓子屋さんと間違われました。北海道羅臼町のスケソウダラ漁、新潟県真野町（現佐渡市）の刺し網漁、宮崎県北浦町（現延岡市）のキビナゴ漁など各地で多くの方々が拒否反応を示さず船に乗せてくれました。

宮崎のキビナゴ漁は午前三時過ぎに海に出る夜明け前の漁です。網をあげたら大漁。でもそれからが大問題。どこの市場に持ち込むかです。市場によって、また午前と午後ではセリの価格が違う。私が乗った時は十倍以上の差がありました。博多・中洲の飲食店で供される時の目の色、鮮度が命だからです。

今拠点としている金沢市の中央卸売市場は国内でも早くセリが始まる魚市場の一つで、日本海産だけでなく全国から海産物が集まります。例えば北海道からは航空便でカニが届き、セリにかかった後、北海道に戻ります。高い値をつける市場に送られ再び産地に帰る。私にとっては奇々怪々。そんな「市場という迷宮」に日本の漁業者は毎日向かい合っています。

宮城大学では学生たちと三回にわたってカナダの水俣病の現地調査をした。

水俣病に似た有機水銀汚染がカナダにもあることを知りました。製紙会社の廃水で下流に住む先住民が病に侵されました。一九六〇年代に問題になりましたが、私は知りませんでした。恥ずかしながら、故郷のことは何でも知っていると錯覚していました。

最初に母と汚染地帯に行き、そこで「私たちは日本人に助けられた」という声を聞きました。カナダ政府が水銀汚染を認めない段階で、熊本から原田正純先生（現在は熊本学園大学教授）ら日本の医師が来て診療してくれたと話してくれました。患者の多くは汚染地帯での農業をやめ政府の助成金で暮らす現状です。政治・経済・社会的に弱い立場にあります。継続的に見ていく必要があると感じて学生を連れて調査なども進めました。

流ちょうな日本語を話しつつもユニークな表現が時折飛び出す。「頭の中が竜巻状態」もその一つ。

宮城県松山町（現大崎市）に旧家を借りて大学で教えつつ、地元の酒蔵が中核となり進める減農薬農業にかかわる。その一方で全国漁港巡りに取り組み、さらに国連・気候変動に関する政府間パネル（IPCC）の活動にも。まさに竜巻状態である。

大学への通勤範囲内で日本家屋を探していたら、酒蔵の一ノ蔵の鈴木和郎会長（故人）から電話があり、松山町内の六百七十坪（約二千二百平方㍍）もある旧武家屋敷を紹介していただいた。その縁で同町の酒米研究会にも加えてもらった。農家の有志が一ノ蔵と契約して農薬や化学肥料を減らした酒米栽培に挑んでいます。減収への不安があったと思いますが、酒蔵がリスクを負う形で環境保全を考えた農業を模索しています。

田植えのころの水田は本当にきれいです。水をたたえた田んぼは湖のよう。巨大なグレープフルーツのような満月が田んぼに昇ります。

研究者の中には農業が環境破壊の元凶だと言う人もいます。私はそこまで言いません。しかし石油や化学製品に依存した農業が自然との間に溝をつくってきた事実も見逃せません。その結果、農家が周囲の自然に向けるまなざしが変えているような気がします。生意気を言わせてもらえば、戦後の日本はあまりモノを考えなくてもできる農業を育ててきましたが、これからは強いプロ意識を持つ農家が必要です。

（聞き手は編集委員　滝順一）

キャンピングカー「あん・まくどなるど」は和菓子屋と間違われた

■日本の海岸線８割回る　カナダでも水俣病、知らなかった

■減農薬で酒米づくり　化学製品頼み、自然へのまなざし曇らす

核の番人 育てる

ひとスクランブル

東京大学で学生に教える久野祐輔氏㊤

人の育成だ。日本は「唯一」にはウィ・部で四カ・ンスもあ・「国際・り皮膚科・て国際会議・面白い。

フォーカス

環境省、初の生え抜き

厚生労働省や財務省出身者が務めてきた環境省の事務次官に、旧環庁からの生え抜きとし